

意訳 枝幸砂金採収の実況



へるふね Perupnei



目次

意識 枝幸砂金採収の実況

枝幸砂金採収の実況は、北海道毎日新聞（北海道新聞の前身）に、明治32年8月11日～17日の間、4回に分けて掲載された記事である。当該記事は、枝幸砂金地の記録としては最古のものと思われ、密採収時代の様子を伺い知ることができ興味深い。本書は当該記事を意識紹介するものである。

枝幸砂金採収の実況 吉 成二 囚報

昨年、北見国頓別川で砂金が発見されたと伝わって以降、北海道はもちろん全国各地から、砂金採収のため、響応雲集して枝幸地方に来る者1万数千人に及び、蟻が蜜に群がり、カラスが腐屍に集まるが如く、その遺利を拾わんとして、競争喧噪する様は筆舌に尽くしがたい。

枝幸地方は北海道の小クロンダイクと称され、その繁栄雑踏は全く予想外の事であるが、私は全道漫遊の折その状況を見聞したので、この小黄金国の様子を世間に紹介するものである。

・ペーチャン及びウソタンナイ

ペーチャン及びウソタンナイは、枝幸の起業家廣谷季太郎氏外7名の共有許可地にして、請願巡査が10人配置され、枝幸町幸町に事務所を置き、採取地には2か所の仮事務所が置かれている。

ペーチャンは枝幸市街から15里、ウソタンナイも10里の距離があり、険山危崖をよじり、山間水流を渡る行程は困難ではあるが、ウバトマナイやトンベツ川沿には1本の道が通じ、馬背をもって米嚮を運搬している。

砂金採収人は7～8百人、1人1月の採収料は場所の良し悪しにより、砂金1匁～4匁である。

・パンケナイ

パンケナイは、枝幸の堀川泰宗氏の許可地にして延長4里、2か所の事務所に請願巡査2名、事務員20名を配置し、堀川氏自らこれを監督している。

枝幸からの距離は6里、昨年道庁が作った幌別原野殖民道路を利用できるので通行は容易である。採収人はおよそ7百人、1人1月の採収料は砂金1匁5分である。

・小鉈区

個人又は少数の共同鉈区で、自ら数人を雇って採収するものが7～8箇所あるが、規模が小さく取るに足らないので、ここでは記さない。

・密採収地

廣谷、堀川等数十人の出願地で未許可のもの、未出願地で個人及び数十人の団体で密かに採収するものが、ニセイケショマップ、モペーチャン、ピラカナイの3カ所ある。

ニセイケショマップで密採を行う者に聞くと、6月10日頃、この川の兩岸には千戸以上の草小屋があり、一戸7～8人が居住して総数は7～8千人、あたかも一市街を形

成している。

20日頃、警官が来て、やむなく他へ転ずる者3～4割あるが、宝の山に入りながら警官の説教位で下山する者はなく、それらはモペーチャンかピラカナイ、小支流を跋涉して山奥に侵入する。今日ではニセイケショマップにいる者が4千人を下らず、草小屋の数は6百以上、たまたま請願巡査が巡回すると、彼らは木の陰に隠れてやり過ごし、巡査の姿が見えなくなると、すぐに採収に従事するのである。

元来、命知らずの冒険者で、数千人の密採人の中には凶暴なごろつきも混じっており、加えて斧、テコ等の凶器を携帯し、人跡未踏の山間幽谷で如何なる事件を引き起こすかもわからず、多勢に無勢、警察も彼らを追い払うことができないのは無理のないことである。

枝幸から同地に輸送する米の量をみても、ニセイケショマップ、ピラカナイ、モペーチャンの密採人の数は1万人を下らない。

・荒野の新市街

上幌別原野では、7月初旬より、機知に富んだ商人続々入り込み、荒物店、蕎麦屋、白首屋等50余戸の新市街が、わずか1カ月で出来上がった。

紋別の白木屋は、7月28日に開店大売出しを行い、3日間で2千円の売り上げがあった。これらの客は5円10円の紙幣を出すので釣銭が不足し、早速本店に打電して千円余の1円紙幣を取り寄せたという。その後の売り上げも1日50円を下らず、その繁盛は他店も同様で、毎日30円内外の売り上げがあるという。

・白首と砂金の交換

その筋では、砂金と物品との交換を禁じたが、市街地に近い鉱区の採収人は、砂金を売って紙幣を得るのが容易だが、密採人は深山幽谷交通不便な地に居るため、通貨を得るのが難しく、必需品である米噌を調達するにあたって、砂金と交換する傾向がある。ニセイケショマップ方面には数人の白首が徘徊し、一夜の花を砂金で手折らすのであるが、幌別新市街の白首も、2分の砂金に転ぶものがあるという。

・強いもの勝ち

7月中旬の事である。ニセイケショマップの採掘場は非常に好況で、我も我もと人が集まった。最初の発見者は先占権を主張して、それらを退けようとしたものの、1人の暴漢大いに怒り、「自分が泥棒ならばお前も泥棒だろう、何をもってお前の持ち場と言うのだ」と口論の末遂に大立ち回りとなった。

最初の発見者は半死半生の目に遭わされ、更に数名も腕力で追い払われた。暴漢は、お山の大將我一人と大威張りにて、2時間で10匁を採収したという。

・1升の米価15円

パンケナイで、2人の採収人が数間離れて採収していた。甲は金脈に当たり昼までに10匁を採収、乙は僅か2～3分の収穫に過ぎなかった。

甲は、米が足りないので昼食の準備もできず、空腹に耐えながら採収していたが、か

ねて乙に米があるのを知り、少し分けてくれないかと頼んだところ、乙は米1升砂金4匁ならば分けてやろうという。

甲は余りに法外な値段に躊躇したが、他で買おうにも、町まで3～4里を下るには半日を費やすことになる。幸い自分は金脈に当たり、日没までに数十匁は確実に、1升4匁の砂金は高いとはいえ、8匁を得れば4匁残るのであり、交渉の末遂に3匁5分で買うことになった。これを市価に換算すれば、米1升15円ということになる。

・禅坊主砂金取りと化す

年の頃50輩の禅僧、飄然として7月初旬パンケナイに現れた。入場料を払って採収に従事し、安眠をもむさばらず採収したる砂金50余匁。下旬より続く大雨にも屈せず、一意採収に従事せるより、鉱主これを慰めて休憩せしめんとするも、坊主頭を打ち振って曰く、「金が採れますので面白くてとても休むわけには行きません。雨が降るのは金が降るのでござんす」と。地獄の沙汰も金次第とはいえこの坊さん、拝金宗に改宗して極楽往生疑いなきや。

・飲食店の大繁盛

枝幸市街地は、各町辻々にテントを張り、小屋を構え、天ぷら、一膳飯、煮肴を店頭に飾り、ビール、葡萄酒、焼酎等を羅列し、大坂酒樽積み上げて、砂金採収人に下山を促す。コップ1杯売より始まり、1日のうちに大坂酒1～2升、ビール数十本を倒し、1日4～50円の商いありとは、滅法界の好景気と言うべきなり。

・遊郭の熱狂と旗亭の寂寥

遊郭毎夜の繁盛実に驚くべき程で、紋別その他より出稼ぎする娼妓も少なからず。連日、昼夜弦歌の声呻吟をも動かすばかり、遊客は砂金採収人にて独身の乱暴者、採収地でフキ、ウドの雑炊に命を繋げる者のこととて、米増の欠乏で下山する者は、いずれも数十匁の砂金を売却し、巨額の札束を握りいよいよ太腹となる。一夜の花を買うためには、金は湯水のごとく使い流し、あたかも女郎屋のために砂金を採収するの観あり。

遊郭の収入非常に多くその景気格別なり。それに引き換え市中の料理店、人足少なくすこぶる寂寥、砂金採収人の目的は酒食にあらずして女色にあり、かつ中等以下のもの嗜好に適さざるためか。

・木賃宿の増加と旅客の迷惑

砂金採収人で多少思慮ある者は、なるべく経費を節約しようと木賃宿に泊まるので、需要に従い木賃宿が増加している。

旅館は藤野、内田をはじめ3～4の旅籠屋あり、いずれも繁盛を極め多数の宿泊客あるが、客の待遇行届かず、すこぶる高価を食るとは、砂金熱の然らしむところ、砂金に関係ない客は大迷惑である。

藤野旅館の如きは旅客1日30人を下らず、7月中は1日90人の宿泊者あり、もってその繁盛雑踏の一旦を知るべし。

・労役賃金の標準

枝幸地方の職人、土方、人足は、その賃金を砂金1日の採収額より割り出す。1人1日の収穫4分とし、これを1匁3円80銭の相場とすれば、日当は1円52銭となる。大工は1日1円50銭、土方は1円とし、これより下れば鼻うごめかして応じない。

・諸商店の景気

呉服荒物はじめ、売薬菓子等1日の売り上げ20円を下らず、特に渡辺商店の如きは、雪解け後今日まで数万円の売り上げあり、もって枝幸の活況を知るべし。

・白米の輸入

藤野回漕店が6月に扱った米は2千俵、遠藤、内田も同数の取り扱いにて、3店合わせて6千俵が枝幸の1カ月の輸入総額である。

労働者2人で月1俵食べるとすると、住民の外に1万人以上の採収者が来ていることは間違いがない。

・採収者と汽船

砂金採収で各地より来集する者は、汽船入港の毎に4～50人、多い時は百人以上に及び埠頭は非常に混雑する。

5～6月は、1日4～5百人の上陸があり、宗谷から海岸伝いに陸行する者、天塩山越に来る者を加えれば、全体で何人かは解らないものの、汽船上陸の数だけで7～8千人を下らないという。

・道路の破損

北海道庁は鈴木事業手により、幌別原野殖民道路を開削させ、沿線住民の便宜を図った。雪解け後に砂金熱が盛んとなり、この道路は砂金採収者専用道路の様である。晴雨に関係なく毎日4～50頭の駄馬往来し、せっかく開設した道路も大破に及び、人馬往来の不便を感じると共に、「道庁は大金を使ってこんな二束三文の道路を作った」などと、自分らが踏み壊した罪は棚に上げて、小言だらだら通行するものもある。その筋においては、この道路の馬行を禁止する計画があるという。

・駄賃と物価

幌別原野殖民道路を利用する駄馬は毎日4～50頭あるが、この荷物は概して米増である。1頭の馬に白米4斗を積み、近くはパンケナイ、遠くはニセイケショマップ、モペイチャンの密採収地に運搬している。

殖民道路は6里に過ぎず、それ以降は深谷を伝い険阻を追い、10余里の駄賃は2円以上、白米1斗の運賃が50銭を超え、その地における米価は幾らとなるかわからない。

・従来 of 採収額

本年7月中旬までの砂金採収額は、砂金と物品を交換したもの、枝幸で買い取られた

もの、直接東京に輸送したもの等があり、正しい数字を知ることができないが、枝幸で売買したものはおよそ40貫、1匁3円80銭の相場とすると15万2千円となる。

渡辺商店は、店員が出張して10貫を買い入れ、市内商店では店頭砂金買い入れの看板を掲げ、1万円内外の買い入れをする者19軒、相当の採収額があることは疑いがない。

・砂金と貯蓄

採収者の中には、無頼放逸の者も少なくないが、多くは富貴を将来に賭する者であり、冗費を節し勤勉を旨とし、日常の米糧を購入するためだけに若干の砂金を割き、他は通貨に換えて貯金し、故郷に郵送する者1万余人中の7割を占める。

・郵便局の迷惑

前項の様に、故郷に宛てた為替を振り出す者日々数十人あり、枝幸郵便局は資金を持て余しているという。

意識 枝幸砂金採取の実況

著 者 へるふね

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
